

### ネパール集落コミュニティのエンパワーメント―金融組織の変遷を手がかりに

辰巳佳寿子

#### ●はじめに

個人は、家族・親族、組織、地域社会、国家等の様々な社会に属し、他者との相互行為を通じて生活をしている。フリードマンは、エンパワーメントのモデルとして、世帯の社会的な力の八つの基盤（防衛可能な生活空間、余剰時間、知識と技能、適正な情報、社会組織、社会ネットワーク、労働と生計を立てるための手段、資金）が、相互に影響しながら螺旋状に増加していく過程を表している（参考文献③）。このモデルでは、エンパワーメントの主体は世帯となっているが、個人や別の集団にも適用できると筆者は考えている。どのレベルであっても、エンパワーメントは、静止した地点でつかめるものではなく過程において認識されるもので、重要なのは、個人や各集団で起こっている変化を動態的に捉えることである。

本稿では、一つのプロジェクトによるエンパワーメントの過程を追うのではなく、政府や開発機関のプロジェクトが実施される「場」である集落を起点に、そこで実施された異なる二つのNGOによるプロジェクトの失敗を経て、集落コミュニティが自分たちの相互金融システムを定着させていく過程を追う。筆者はこの過程こそが、住民個々人や世帯・集落が自らエンパワーメントしていく過程であったと考えるからである。

#### ●B集落における開発組織の衰退

事例として紹介するのは、ネパール山岳地域の五〇世帯あまりのB集落である。集落は、行政村の下位集団で自然村に近い。山岳地域では集落間に距離がありそれぞれの地域条件が異なるため、集落への住民の帰属意識が強いといえる。B集落は、ヒマラヤ観光のトレッキングルートからは外れているため、観光業は乏しく、農業従事者が多く換金作物によって家計を支えている世帯が多い。

B集落には、農業や家畜、森林、金融、生活向上等の開発プロジェクトの受け皿として、その都度、住民の組織が形成されてきたが、どの組織も長続きしていない。ここでは、それらの中でも金融活動を行った

二つの開発組織の活動とその衰退をみていきたい。

①女性金融開発組織は、NGOによるグラミン銀行型のマイクロファイナンスの受け皿として一九九四年に開始された。五人一組のグループによる相互監視や連帯保証という前提で無担保で融資を受けることができる（図1、表1）。

開始当初は目新しい取り組みであるため集落の約四割の世帯の女性がこの組織に参加していたが、その後脱会者が続出したことから、一九九九年に活動が停止された。脱会理由としては、お金がなくて返済できないという経済的な理由、返済できる能力はあるが他の人が返済しないため自分も返済しないというモラルの問題、「資金を横領しているのではないか」というNGOスタッフ（外部者）への不信感があげられる。スタッフへの不信感は、メンバーの規則に対する理解不足から派生したともいえるが、誤解であったとしても連帯意識が強いがゆえに疑念を含む噂は一気に高まり、メンバーの間ではNGOの悪い印象が固定化され、活動を停止せざるをえなくなった。集团的

表 1 B 集落における 2 つの NGO による開発組織の金融システム

	① 女性金融開発組織	② 複合的開発組織
活動内容	金融活動のみ（借入、貯金）	生活上のための活動（飲み水、農業振興、金融活動等）
金融システム	グラミンバンク方式（5 人 1 組）	ROSCAs*
参加形態	任意（女性のみ）	強制（世帯から 1 人）
借入額	1 年目 5,000 ルピー、2 年目 7,000 ルピー、3 年目 10,000 ルピー、4 年目 12,000 ルピー、5 年目 15,000 ルピー	500 ～ 2,000 ルピー（必要な額だけ）
借入金	外部資金（一部は内部資金）	内部資金
毎月の入金	100 ルピー（強制貯蓄として。3 年間は引き出せない）	20 ルピー（掛金として）
返済	返済期間 1 年、毎月分割返済	3 ヶ月後に一括返済

（出所）筆者作成。

（注）1 ルピーは約 1.5 円。\* ROSCAs は Rotating Savings Credit Associations（回転型貯蓄信用講）の略称。

図 2 複合的開発組織の金融システム

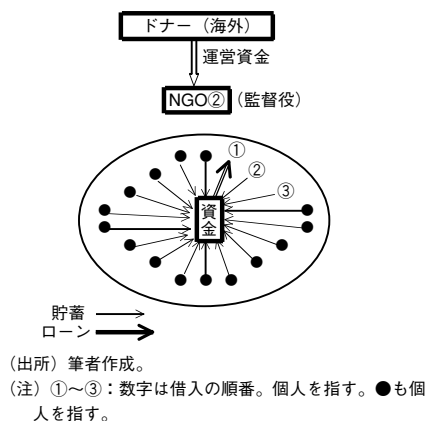
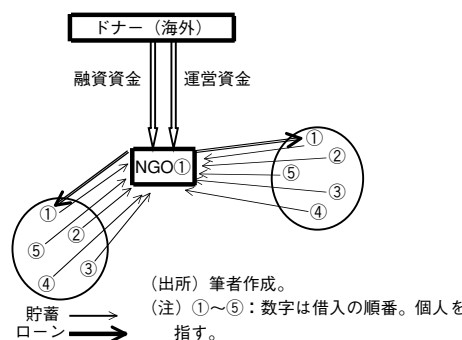


図 1 女性金融開発組織の金融システム



な凝集力がマイナス方向に働いたケースといえる。

②複合的開発組織は、①とは異なる NGO のプロジェクトで組織化された。飲料水の整備、野菜栽培のための技術指導や種や農薬の支援、灌漑、金融活動等、様々な側面から生活を向上させようとするもので、全世帯から必ず一人が参加しなければならぬ。

金融活動は全体の活動から見ると補足的な位置付けになるが、メンバーが月々二〇ルピーを出し、その掛金の総額を順番で毎月一人から二人が受け取るという内部資金を活用した日本の頼母子講のようなシステムである（表 1、図 2）。このプロジェクトの狙いは三年間現地スタッフを置いている間に受け皿組織を住民の自立的な組織運営の主体へシフトさせることであった。しかし NGO スタッフ撤退後、活動は消極的となり形骸化している。その理由として、

当初から「参加すれば NGO からの恩恵が得られる」という意識のみが強く「自分たちの組織」という意識が根付かなかったことと借入額が小さく住民のニーズに合わなかったことがあげられる。

## ●「三〇〇グループ」の登場

上述した二つのプロジェクトをはじめとして、B 集落に様々なプロジェクトの導入と撤退が繰り返されるうちに、外部プロジェクトへの住民の期待は低くなっている。さらに、この地域一帯の多くの住民がタマン族で、プロジェクトを実施するスタッフが集落外の他民族・カーストであることが多く、これまでの活動の中で彼らが良い影響ばかりをその地域に残してきたわけではないので、外部からの援助活動に対する不信感は小さくない。

しかし、①と②の二つの組織が衰退した後でも、住民の資金需要が高かったために、B 集落のコミュニティでは、独自の金融システムを自主的に始めた。集落内のほぼ全世帯が参加し、毎月決まった日に各メンバーが三〇〇ルピーを預け、その合計額をあらかじめ籤引きで決めた順番に従い順次受け取る方式である。受取額は一万五〇〇〇ルピー程度である。

先述した②のプロジェクトの金融活動とはほぼ同様の形態をとっていて（図 2）、そこでの経験が活かされているといえるが、以下の点で大きく異なる。「自分達で始め

た」という意識をもち内発性が強いことや受取額が大きいこと、そして、冠婚葬祭や家屋建設、出稼ぎ資金等、銀行やプロジェクトでは借入のできない目的に使えることである。また、返済の必要はないとされているものの、毎月三〇〇ルピーを払うので返済していることと同じことになるが、住民には返済に迫られるという感覚がない。一度に全員が集合してミーティングをする必要もなく、期日までに約束のお金を会計に預ければいいので、時間的なコストも低い。

決まった日時に納めなければこれまで預けてきたお金がゼロになるという規則が作られていることもあるが、約束を破れば地域内で非難などの風刺的制裁や人間関係上のプレッシャーという無形のサンクションが科せられるので、二〇〇三年の調査時点では五年が経過し二巡目に入っていた。現在でも良好に続いているようで、これまでお金を預けなかった人は出ていない。

このように良好な運営ができるのは会計役への信頼が大きいからである。会計役は元グルカ兵（勇敢さや忠実さで有名なイギリス軍の傭兵）であり海外での戦争経験をもつ。現在は集落唯一の商店を経営し、住民の情報交換の場になっている。これまでのプロジェクトでは傍観者であったり受け身であった集落内の重要人物が当事者となって責任ある役割についたことも特記すべき点である。



結婚式の様子（筆者撮影）

## ●「三〇〇グループ」の基盤となる集団

実は、「三〇〇グループ」の母体となっているのは、B集落コミュニティのインフォーマルな集団である。B集落では、二十数年前から各家庭から代表者が参加して集落の問題を共に改善・解決する活動が行われている。冠婚葬祭時の鍋や食器などの道具類の共同管理、飲料水や道の整備、学校建設などの共同活動を実施したり、その他集落内で問題が生じると集まって問題に取り組んでいる。

筆者が集落コミュニティや「三〇〇グループ」の活動に気づいたのは、二〇〇三年に開発組織の活動を掘り下げて調査していた時であった。二〇〇〇年の聞き取り調査で、筆者がどんな「組織」があるのかを尋ねた際、住民が教えてくれたのはプロジェクトのための「開発組織」のみであった。つまり、住民にとって「組織」とは開発組織を意味し、集落コミュニティや「三〇〇グループ」は「組織」として認識されていなかったのである。集落コミュニティは、正式な呼称がなく捉えどころがないが、ここには、例えば冠婚葬祭等の行事の企画から実施までのノウハウが蓄積され、ある程度の役割分担ができており、柔軟な組織の機能をもっている。そういう下地があったからこそ、①や②の開発組織での組織運営や社会経済活動の失敗を活かして、金融面

において「三〇〇グループ」という地域に適応したシステムを作りだすことができたのである。なお、「三〇〇グループ」にも正式な組織名はないが三〇〇ルビーズと呼ばれるので、筆者が実態を把握するために名付けたものである。この呼称で尋ねると大方了解がとれるようになった。

B集落コミュニティの新しい展開は、集落内外で個人と個人の相互作用が起こり、個人や世帯のエンパワーメントだけでなくそれを越えて、集落のエンパワーメントが起こったことを示している。次節では、この過程を整理していこう。

## ●B集落におけるエンパワーメント

B集落において相互金融システムが定着する過程を、フリードマンの八つの社会的な力の基盤によるエンパワーメントモデルを活用し、個人・世帯・集落という視点から整理してみると次のようになる。

「防衛可能な生活空間」の最小単位は世帯であるが、その周囲には相互扶助によって集落社会全体の向上を図る集落コミュニティというなわばりがある。地域内に組織が多数あることは、ある組織で不足している機能を他の組織で補える可能性があり、地域社会の調整機能を大きくすることにつながる。この事例は、集落に組織が増えたわけではないが、集落コミュニティに新たな機能が増え複合的な組織に発展したとい

う点で、集落社会の調整機能が大きくなったといえる。

さらに、集落から市場や諸施設が集まる郡庁所在地へのアクセスが容易であるため、「生存のために費やす時間以外の余剰時間」をもつことが可能である。

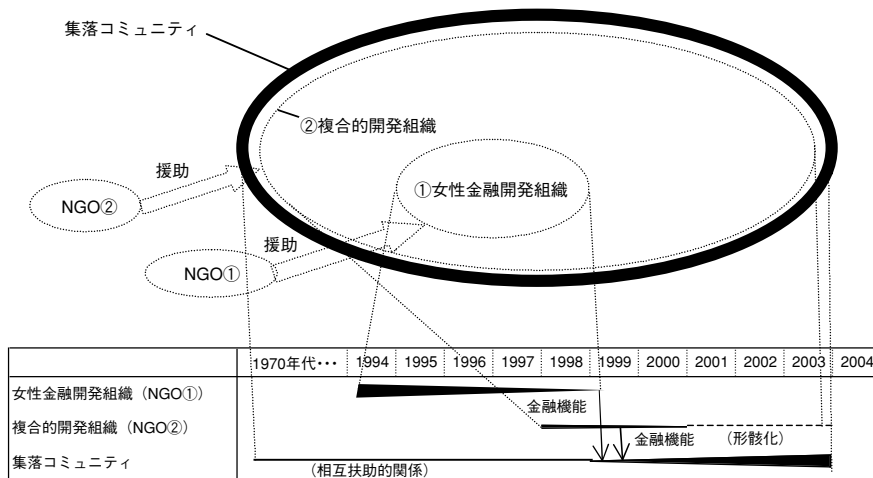
外部プロジェクトの導入、出稼ぎ等を通じて個人は「知識と技能」を得、交易や観光等で訪れる人々との交流等を通じて、世帯や集落に有用か否か、適切か否かという「適正な情報」を個人・世帯・集落単位で識別している。様々な開発組織での経験を通してこれらの力を獲得してきたのである。

共同の水へのアクセスや労働や生活に使う道具などの「労働と生計を立てるための手段」は②の複合的開発組織をはじめとした開発プロジェクトや集落内の共同活動で整備されてきている。これらの影響で、二〇〇二年のサンプル調査では、B集落の平均所得は貧困ライン以下であったが、世帯支出平均の約六割が食料品以外の支出に充てられており、中でも冠婚葬祭等への支出割合が他集落に比べて高くなっていた（参考文献④）。自家生産物を主として、換金作物による収入で食糧を補うことで世帯経済が比較的安定してきたのである。

これら五つの社会的な力の増加は、生まれては消えた開発組織も含めた「社会組織」や集落内外の「社会ネットワーク」の相互の関わり合いや記憶の蓄積の中で進め



図3 B集落における開発組織の衰退と集落コミュニティの発展



(出所) 筆者作成。

(注) 実線の太さは活動度合い、点線は衰退・停止・形骸化を意味する。実線矢印は機能の移転。

られてきた。これは、B集落では冠婚葬祭等の交際費への支出割合の高さにも表れているように社会関係に投資する風潮が強いことが影響していると考えられる。

基本的ニーズが最小限満たされると、共同の行動をとる代わりに、より個別的、家族的な行動をとる傾向があらわれるとフリードマンが指摘しているように、B集落では個人または世帯が自身の利益を追求するだけの所得や価値観をもち始め資金需要が高まっていた。そして、個人的な欲求を充たすために①や②のプロジェクトの金融組織に参加し、その失敗を経た後、世帯は集落コミュニティが主体となった「三〇〇グループ」を通じて安心で安定した「資金」へのアクセスを獲得できたのである。つまり、これまで共益的な活動を行っていた集落のコミュニティに、金融活動という私的な利益を追求する経済的な機能が付加されたといえる(図3)。

自信・自尊心、計

画策定能力等の個人の心理的なエンパワメントだけでなく、個人が組織活動に意義を見出し主体的に参加すれば、個人レベルでは不可能だったことが可能になり、これが集団のエンパワメントへとつながるのである。

## ● おわりに

①の女性開発金融組織や②の複合的開発組織を、それぞれのプロジェクトの結果として捉えるのであれば「失敗」という評価が課せられるであろう。しかし、観察する時間と空間を、少しアングルを引いてみてみると、B集落においては、これらの失敗があったからこそ、独自の金融システムの展開が可能であったと考えられる。このように捉えようと、二つのプロジェクトが住民にとって無意味だったとは言えない。さらに、隣集落では、見様見真似で「三〇〇グループ」を覚え、「五〇〇グループ」を始めるという波及効果もみられる。

政府や開発機関のプロジェクトは住民にとっては「よそ者」である。エンパワメントは、他者とのダイナミックな相互作用の中で生じるもので、プロジェクトとしては失敗であっても、よそ者との接点によって、新しい情報と知恵を得、失敗を通じて自分たちのニーズを知り、自発的な行動を起こすという変化が表れたのである。ここによそ者が介入する意味が見出せる。

集落内の動きは今この時も変化し続けて

いるため、本稿で紹介した動きは、ある特定の短い期間をとりあげた限定的なものである。しかし、在地組織の役割や住民自治による持続的な地域社会の形成について示唆を与える事例である。今後、コミュニティにおいて共有される価値の実現に向けた行動が起こる等のエンパワメントの政治的な側面がみられたり、親密なコミュニティであるが故の問題点が生じる可能性があるため、これらの動向を追跡していく必要がある。

(たつみ かずこ/山口大学エクステンションセンター専任講師)

## 《参考文献》

- ①久木田純・渡辺文夫編『エンパワメント——人間尊重社会の新しいパラダイム』現代のエスプリ第三七六号、至文堂、一九九八年。
- ②佐藤寛編『援助とエンパワメント』アジア経済研究所、二〇〇五年。
- ③ジョン・フリードマン(斉藤千宏・雨森孝悦監訳)『市民・政府・NGO—「力の剥奪」からのエンパワメント』新評論、一九九五年。
- ④辰巳佳寿子「ネパール山岳地域における食糧自給と家計戦略」『農林業問題研究』第四〇巻第一号、二〇〇四年) 一四九、一五三ページ。